

【県営倉渕ダムはなぜ中止になったのか】

情報公開で刑事事件に

烏川の治水対策にダムを造るのと河川改修を行う場合の総事業費の比較において、群馬県は河川改修の用地費を実勢価格の数倍に設定し、ダムの方が安上がりとしていました。また、情報公開で市民に一旦公表した上記の用地費単価を隠そうと、すぐさま回収し書き直して公表したことから、公文書毀棄と私文書変造の罪で刑事事件になりました。その後不起訴となりましたが前橋検察審査会は「不起訴不当」の議決を出しました。これにより実勢価格を用いて計算すると、ダム建設より河川改修の方が安くなることが明らかになりました。

想定氾濫面積の度重なる変更（縮小）

市民団体等の指摘で群馬県は、100年に一度の洪水で倉渕ダムを造らなかった場合に起きる、想定氾濫面積を当初の1/3以下に修正しました（最初の倉渕ダムパンフレットの氾濫面積図を基に試算すると1/5以下になります）。

ダムによる水位低減効果はわずか

群馬県は、100年に一度の洪水時に烏川に流れ出る想定流量（基本高水流量）を国の算出値よりも1.4倍多く見積もっていました。国が2025(令和7)年3月に策定した河川整備計画でも気候変動による想定流量の増加は1.2倍程度です。

その見積もりでの県の計算によると、治水基準点の君が代橋（国道17号と18号の分岐点付近）のダムによる流量削減効果は200 m³/sで、水位に換算すると20 cmの低下とごくわずかです。

ダムの費用対効果は0.1程度

烏川は下豊岡地区（信越線上流部の右岸）の一部に堤防のない地区がありましたが、堤防を造ることで、ダムの費用対効果は0.1程度（効果ありは1.0

以上) となることが判明しました。

倉渚ダムの中止に伴い、群馬県は河川改修を確実に実施していて、現在は前記の堤防は完成しています。

倉渚ダム中止の最大要因は低い治水効果

2015(平成 27)年倉渚ダムは事業中止となりました。中止の理由として、厳しい財政状況と水需要の低下と一般的には言われていますが、治水効果がないことが最大の理由です。

水利権の確保を目的にダム建設に参画した高崎市はダム中止後にダムによらない水利権を得ています。もともと、烏川の流量は安定しており高崎市の水道用水や農業用水などにも支障はありませんでした(近年渇水による大きな被害は出ていない)。

【ダムを造りたい国交省】

治水効果のない倉渚ダムを、群馬県に代わり国が事業主体となり事業再開を視野に調査を始めました。倉渚ダムの建設目的を、利根川中下流域の治水対策と位置付けています。

ダムの治水効果は、下流に行くほど減衰します。烏川の群馬県管理区間において治水効果がほとんどなかった倉渚ダムは、利根川下流域の治水対策に役立つのでしょうか？

八斗島治水基準点での倉渚ダムの効果について考える

2019(令和 1)年の台風 19 号(東日本台風)の豪雨では、八ッ場ダムが試験湛水中であったことから、一気に水位が上がり満杯になり、水位低下に一定の役割を果たし利根川の氾濫を防いだとの誤情報が流布されました。この時、伊勢崎市にある八斗島治水基準点での水位を、八ッ場ダムはどれくらい下げたのかを国交省に問い合わせると「計算していない」とのことでした

(2026年7月)。「八ッ場あしたの会」のHPによると島津輝之氏の試算では、16～30cmとなる)。この豪雨の時、八ッ場ダムが貯留した水量は7500万 m^3 でした。これに対して、倉渚ダムの治水容量は600万 m^3 と八ッ場ダムの8%です。またダムの集水面積は八ッ場ダムの2.9%とごくわずかです。

国交省は中止ダム予定地の可能性検討の中で、倉渚ダムの八斗島治水基準点での流量低減効果を50～120 m^3/s としています。これを水位に換算した数値を国交省に問い合わせましたが「検討中」と回答は得られませんでした。

これらのことから倉渚ダムの八斗島地点での水位低減効果は無いに等しいといえます。

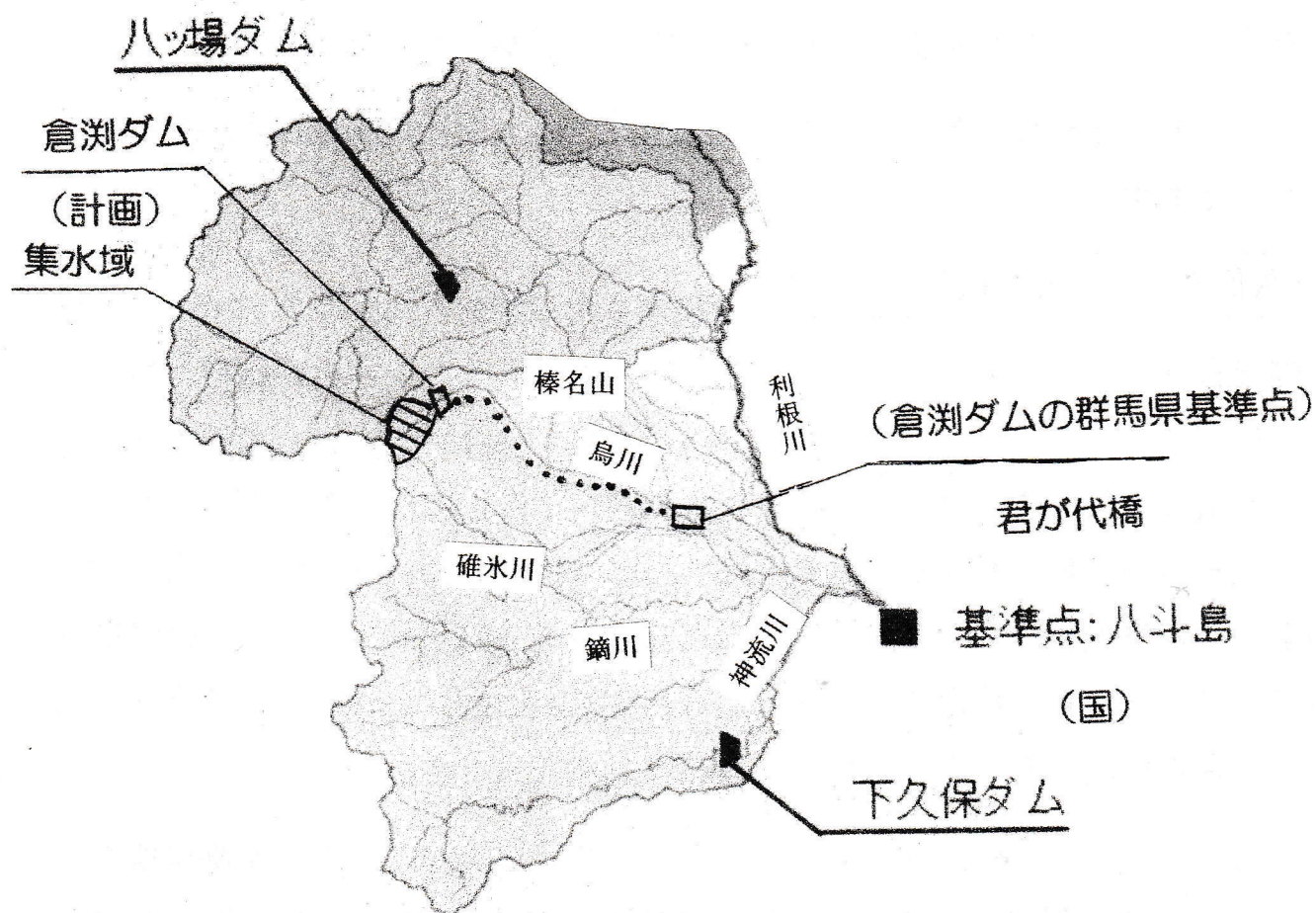
下久保ダムとの容量振替について

国交省は、八斗島上流のダム群の中で、ダムによる治水容量が現在、烏川、神流川流域で不足しておりバランスがとれていない、と言っています。それを理由に下久保ダムの利水容量を、倉渚ダムと中止になった5ダムでまかない、その分下久保ダムの水位を下げて洪水に備えるというのです(注)。このような容量振替を行なっても、倉渚ダム分の下久保ダムの八斗島での流量低減効果は、国交省の算出で、50～120 m^3/s とわずかです。倉渚ダムは今後500億円(さらに増える)も投じて行う事業ではありません。

2026年6月3日時点での下久保ダムの貯水率は32%と平年の4割に留まり、10%の取水制限をしている(7/7に解除予定)。年ごとに降水状況は一変するが、天候にかかわらず今後、水需要の低下が見込まれ、まずは既存のダムの利水容量と治水容量を見直し、ダムに代わる治水計画を検討すべきである。

烏川、神流川流域図

(ハッ場ダムは吾妻川流域)



○烏川は榛名山南面の降雨量が多い。倉淵ダムは榛名山系から外れた上流部に位置しており、集水区域は狭く、烏川の洪水対策にはならない。

○烏川に合流する碓氷川流域と鎗川流域に降った雨は、下久保ダムでは洪水調節はできない。

倉淵ダム研究会